

「他人に迷惑をかけてもいいじゃないか」

老人たちと車イスの青年たち

「弱者」とのかかわりのなかから

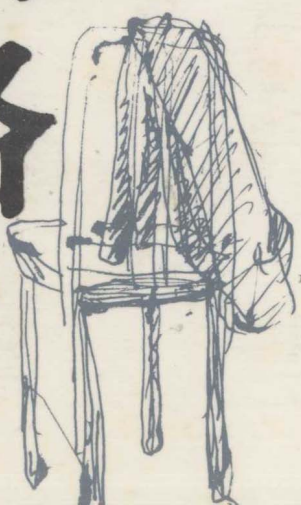
緊張感溢れるドラマが生れる

「シルバー・シート」「車輪の一步」

などを収録した

円熟のシリーズ

完結篇



yamada taichi

山田太一

作品集

4

男たちの旅路

2

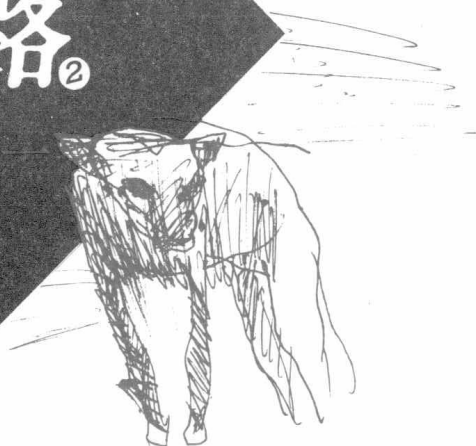
yamada taichi

男たちの 旅路^②

山田太一

作品集

4



大和書房

山田太一作品集—4

男たちの旅路②

1985年7月30日 第一刷発行

著者—山田太一

発行者—大和岩雄

発行所—大和書房

東京都文京区関口1—33—4 〒112

電話番号(203)4511

振替 東京6—64227

印刷所—信毎書籍印刷

製本所—ナショナル製本

装幀—菊地信義

装画—田中靖夫

©1985 Taichi Yamada Printed in Japan

ISBN4-479-55004-6

落丁本・乱丁本はお取替します

山田太一
作品集
4

目次

シルバー・シート	5
墓場の島	43
別離	79
流水	117
影の領域	153
車輪の一步	193

あとがき 241

・
・
・
・
・
・
・
・
シルバー・シート
・
・
・
・

シルバー・シート

NHKテレビ

一九七七年十一月二日

●スタッフ

制作——沼野芳脩

演出——中村克史

音楽——ミッキー・吉野

●キャスト

吉岡晋太郎

鶴田浩二

杉本陽平

水谷豊

島津悦子

桃井かおり

鮫島壮十郎

柴俊夫

門前保正

笠智衆

曾根吉太郎

殿山泰司

辻本満夫

加藤嘉

須田良作

藤原釜足

本木義郎

志村喬

高田院長

佐々木孝丸

相沢車庫長

村上不二夫

江上巡査

金内喜久夫

青木シゲノ

新村礼子

●東京国際空港（星）

滑走路に向け巨体を方向転換するジャンボ。

送迎デッキで見ている人々。

国内線チケットカウンターの忙しさ。

計器に置かれる大型スツーカー。

ロビーでお辞儀しあっている人々。

滑走路に向かうジャンボ。

国内線出発ゲートでハイジャック防止チェックをする

杉本陽平と島津悦子。

滑走路へ向かって行くジャンボ。

国際線チケットカウンターの海外へ行く日本人団体客。

そのスツーカーの列。

滑走路でスタートの位置へゆっくり動くジャンボ。

「東京国際空港」の文字。

（まだ成田空港のない時代である。羽田空港。）

忙しく行くガードマン。

位置につくジャンボ。

出発ロビー、別れを惜しむ白人たち。

ロビーの椅子に腰掛け、うなづくようにしてその白人

たちを見ている本木義郎。

スタート寸前のジャンボ。

憧れのように白人を見ている本木。

7—シルバー・シート

チェックしている悦子と陽平。

スタートするジャンボ。

空港の外でウロつく野良犬。

離陸するジャンボ。

本木。

遠くなっているジャンボ。

出発便標示板がバラバラとかわる。

またもやエンジン音をたてて別のジャンボが巨体を滑

走路に向けて移動して行く。

●空港内コーヒーストップ

隅で向き合っている陽平と悦子。制服である。帽子は
テーブルに置いてある。

悦子が陽平に説教をしている。陽平はそんな立場が面
白くなくて仕様がな。掌で目をこすったり、ちょっ
と横を向いたりしている。

悦子「ちょっと」

陽平「（横を向いていて）うん？」

悦子「ちゃんと聞きなさいよ」

陽平「聞いているよ」

悦子「あっち見てたじゃない」

陽平「横向いて、耳を悦子の方にまっすぐ向けたわけよ。

ヒヒヒ（蹴とばされ）イテエッ」

悦子「いいか」

陽平「おう、イテ」

悦子「あんたの言い方は感じ悪いわけ」

陽平「わかった」

悦子「(陽平の口真似で) 失礼しますよオ」

陽平「そう言っちゃいけないのよね。失礼します。ピシャッ。ニコッ。タッタッタッ(とボディチェックの仕草をして) さっぱりとやらなくちゃいけない。ありがとうございしました(と客に一礼する仕草)」

悦子「馬鹿にしてんの?」

陽平「してないよ。フフフ」

悦子「女に指導されるのが、いやなんでしょ?」

陽平「指導されちゃうよオ」

悦子「私は、空港警備のテストを」

陽平「合格したわけ。俺、落ちたわけ。でも俺は悦ちゃんと一緒に空港警備をしたいわけ。だって、このが、工事現場の警備なんかより、ナンボか(わざと関西なまりで) 格好いいもんなあ。フフ(悦子の顔を見て笑いやめる)」

悦子「(じつと陽平を見ている)」

陽平「だから、悦ちゃんの言うことをききます。よろしく、お願いします。フフ、にらまないで。にらまないでん」

悦子「バカ」

陽平「(笑う)」

悦子「(笑う)」

本木「(隣りのテーブルから二人を見ていて、一緒に笑っている)」

陽平「(その方を見る)」

悦子「(その方を見る)」

本木「いいね、若い人は。いまのうちだ(と笑う)」

●国際線出発ロビーの前の道

本木を中に悦子と陽平歩いて来ながら、

陽平「それで、おじいちゃんは、なにしに此処へ来たんですか?」

本木「うん?」

陽平「誰かの見送りですか?」

本木「いやあ」

悦子「見学ですか?」

本木「ロンドンへなあ」

悦子「ロンドンへ?」

陽平「ロンドンへ行くの? おじいちゃん」

本木「ロンドンの、ハイドパークという公園を知ってるかね?」

ね?」

陽平「聞いたことあるよ」

悦子「あるわ」

本木「そうかね」

陽平「その公園が、どうかしたの？」

本木「いや（と立ち止まる）」

悦子「どうしたの？」

陽平「どうしたの？ おじいちゃん」

本木「失礼する。ハハハハ（と淋しく笑う）」

●国内線第一出発ロビー・ゲート

ロビーの混雑。

悦子「失礼します（とボディチェックをはじめる）」

陽平「失礼します（と青年にボディチェックをはじめる）」

青年「くすぐったいよ。よせよ（とかがんだ陽平の頭を両

手でパタパタと叩き、笑いながら身もだえる。短く）」

●空港・表（夜）

情景。

●空港内警備会社・支所

プレハブである。

そのガラス戸をあけ、

船山「（入って来て）船山警備士、警備終了しました」

若杉「（続いて入って来て）若杉警備士、警備終了しました」

板橋所長「（私服で机に向かっていて）ご苦労さん」

陽平「（他の二人ほどと一緒に部屋の一画の仕切りの中で

着替えている）」

悦子「（別の二画で、やはり着替えている）」

船山「またロンドン来てますねえ」

板橋「ああ、じいさんか？」

船山「いま国際線のロビー歩いてましたよ」

清川「（テーブルの前で着替え前の姿で煙草をすっていて）しばらく来なかったけどなあ」

短く、国際線ロビーにたたずむ本木。

陽平「（着替えながら出て来て）あのじいさん、よく来るんですか？」

船山「もうあんたつかまったのか？」

陽平「ロンドンとか言ってたなあ」

清川「ああ、ロンドンだ」

悦子「（着替えて現れ）なに言いたいのかよくわからなかったけど」

板橋「しつこかったらう？」

陽平「そうかなあ」

悦子「そんなことなかったねえ」

船山「気をつけるよ、しつこいんだから」

悦子「そうですか」

板橋「みんな、あれにつかまって往生したんだ」

陽平「そんなすごいんですか」

清川「目が合ったらおしまいだよ。べちゃべちゃ、べちゃ

べちゃ」

悦子「そうかなあ」

陽平「それでもなかったよねえ」

清川「とにかく、しゃべりたくて、うずうずしてるんだ」

国際線ロビーで、人を求めるように立っている本木。

板橋「ああいうのは空港に用があつて来てるんじゃないんだからね。排除するに越したことはないんだが、人権もあるから、やたらにはできない」

清川「相手にしないこと」

船山「知らん顔してることよ」

板橋「横を向くことだ」

清川「ほんと、横向くの。パッと離れちゃう」

陽平「はあ」

悦子「へえ」

●蒲田行きの定期バス

悦子と陽平、並んで乗ってゆられている。陽平の横に本木、腰を掛けている。

陽平「(悦子に耳を寄せ)よう」

悦子「うん?」

陽平「いつの間にか隣にいるよ」

悦子「わかってるよ」

陽平「どうする? 席移る?」

悦子「移ろうか?」

陽平「まったく(と本木の方を見てギクリとする)」

本木「(笑って陽平を見ている)」

陽平「あ、フッフ」

本木「やっぱり、あんたたちか」

陽平「はい。あんたたち。フッフ」

本木「制服を脱ぐとわからないなあ」

陽平「そうでしょ? フッフ」

悦子「あ。陽平、あれ、なんだ(と反対側のドアを指して立って行き、窓の外を見る)」

陽平「あ、なに?(と追って行き外を見て)あれ? なんだろう」

悦子「ついだから、ここ座ろうか(と座る)」

陽平「うん。座ろう(と座り、ちらっと目をあげて本木を見て)フッフ(と笑う)」

悦子「(目をあげ本木を見て)すいません。フッフ」

本木「(その二人を、淋しく諦めた目で見ながら、微笑している)」

●空港(昼)

ジャンボが飛び立って行く。

国際線ロビーで標示板を見ている本木。

国内線ロビーでボディチェックをしている悦子と陽平。

バラバラとかわる標示板。ロンドン、パリ、ニューヨークなどの文字。

●空港内コーヒーショップ

悦子と陽平、クスクス楽しそうに笑っている。

悦子「嘘」

陽平「ほんとだよ。全部女物。いい年したおやじのカバンの中、女物ばかり。口紅だのファウンデーションだのクリームだの」

悦子「セールの人もかもしれないじゃない」

陽平「ちがうって。ピーンと来たね。あれは女装するんだよ、どっかで」

悦子「(改まって) ちょっと」

陽平「うん？」

悦子「私たちは、ハイジャックのオ、チェックをオ、して
るわけ」

陽平「(悦子の台詞のリズムに合わせ) だからア、お客の
オ、他の秘密にイ(早口で) 首をつっこんじゃいけない
わけね？」

悦子「そういうこと」

陽平「しらけるじゃない。すぐ教育するんだから(と横を
見て、あ、となる)」

悦子「(見て、あ、と顔を戻す)」

陽平「(小声で悦子に顔をよせ) まいったね、ちゃんと横
にいるよ」

悦子「(小声で) ほんと」

ウェイトレス「(本木のところへ水を持って来て) いらっ
しゃいませ」

本木「紅茶をくれたまえ」

ウェイトレス「少々お待ち下さい(と去る)」

陽平「どうする？」

悦子「ツうって行こう(とコーヒーをのむ)」

陽平「(慌ててのみ干す)」

本木「慌てることはない」

悦子「(コップ止まってしまふ)」

本木「そんなに嫌なら話しかけんよ」

陽平「別に、俺たち、そんな」

本木「私にだってプライドというものがある。ゆっくり、
のんでいなさい」

悦子「(コップをおろす)」

陽平「(コップを置く)」

本木「きつと、みんなで言ってるんだろう。あのじいさん
に話しかけられたらえらいことだから、逃げてしまえと
ね」

悦子「いえ」

陽平「(悦子に) ねえ(言っていないよね)」

本木「私にも悪い点がある。空港へ来て、外国の匂いがな

つかしくて、つい誰彼となく話しかけた。しかし、それが迷惑なことがわかった」

悦子「(うなずく)」

本木「だから嫌がるものに話そうとは思わない」

陽平「はあ」

本木「それにしても何故年寄りが、なつかしさを少しばかり口にするのを、毛嫌いするのかね？」

陽平「あ、もう時間だね、もう(と時計を見て立とうとする)」

本木「まだ時間じゃあないだろう(と非難するように見る)」

陽平「はあ」

悦子「(立とうとしていた腰をおとす)」

本木「ゆっくりしたまえ」

陽平「はあ(と腰をおとす)」

本木「一時間の休憩としたって、まだ三十分はある筈だ」

陽平「はあ」

本木「情けないじゃないか。いい若いものが、そんなふう

に年寄りを避けるなんて、情けないじゃないか」

陽平「はあ」

本木「年寄りには、君たちになんか知恵も知識もある。私は、ロンドンで十二年間、通信社の記者をしていた。君たち

12

は、マクドナルドを知ってるかね？」

陽平「あ、ハンバーガーの？」

悦子「知ってるわ」

本木「そんなもんじゃないよ(と叱る)」

陽平「はあ」

本木「イギリス労働党の党首だ。一九二三年、私はロンドンへ渡った。第一次大戦が終り、ロイド・ジョージが失墜し、ロンドンは失業者が溢れていた。大英帝国は凋落したか。そんな事が言われていた。しかし、そんなもんじゃあなかった。私はただ街を歩いて、溜息をついていた。日本はなんとまだ貧しい底の浅い国であることかと骨身にしみてこたえていた」

陽平「イテ(と小さく言い)なんだよ」

悦子「だって、行こうって合図してるのに(と小さい声で言い、本木の方を見る)」

本木「(ただ目を閉じている)」

陽平「口で言えはいじゃないの(と立ち)行こうよ、さあ」

悦子「行くよ(弁解がましく)相手しなくていいってこの人(本木)言ったんだもの」

陽平「そうだよ。言ったんだから、俺たち、勝手に行くよなあ(と気がとがめるが行く)」

悦子「行くわ、やっぱり、そりゃあ(と気がとがめながら

行く」

本木「目を閉じている」

●国内線第一ロビー・ゲート

混雑しているロビー、売店の賑わい。

ゲートでボディチェックをしている悦子と陽平。

「失礼します」

「ありがとうございます」

●滑走路（夜）

飛び立って行くジャンボ。

●空港・表

シャッターが、キュルキュルと音をたてておりて来る。

●ロビー

がらんとした各ロビーに、本日のフライトは終了したので、空港ビルは閉めるから、内部にいる人は出てくれ、というアナウンスが聞こえている。

●空港内警備会社・支所

ドッと笑い声をあげて雑談している板橋、清川、船山、若杉、他数人。

清川「こんなでかいトランク、手持ちじゃ困るって言ったって、なんて言ったって持ち込むってきかないんだよ」
若杉「まいったわ、私も」

悦子「（不服そうに私服で）あの、島津警備士、帰ります」
板橋「あ、ご苦労さん」

「ご苦労さん」と口々に言う一同。悦子、外へ出てガラス戸を閉める。

●外

第三出発ロビーの方から制服のまま走って来た陽平。

「あ、悦ちゃん」

悦子「（バスの方へ行こうとしていて振り向き）なによ。どこ行ってたのよ。人が待ってるのに」

陽平「（駆けよって）そ、それどころじゃないんだって」

悦子「どうしたの？」

陽平「国際線のロビーでよ、あのおやじさん」

悦子「どうしたの？」

●国際線ロビー

空港ビルの警備員が三人ほどで、隅の椅子によりかかったままの本木を、ゆっくり横にしようとしている。

警備員「ゆっくりだぞ、ゆっくり、慌てるな」

悦子と陽平、駆けて来て立ち止まり、

悦子「ああッ（とショックを受け）あの人だわァ」

陽平「びっくりしたよ、俺も」

悦子「自、自殺ですか？ その人」

警備員「（にらんで低く早く）まだ死んじやいないよ」

悦子「（陽平に）あんた、死んだって言うから」

陽平「静かに、静かにィ（と制する）」

警備員「よおし、よし（と横にし終える）」

本木「目を閉じて意識がない」

悦子「ああ、あのおじいちゃんだわァ（と自責の念がこみあげる）」

●吉岡のアパート・表（昼・雨）

●アパート・部屋

吉岡「（お茶をいれながら）脳溢血のういつくちか」

悦子「（しょんぼりと）ええ」

陽平「結局、病院へ行くまでに死んじやったんですよね」

悦子「脳溢血じやないかって、空港ビルの人、随分ゆっく

り横にしてたのに、私、大きな声で、自殺ですか？ な

んて言っちゃって」

陽平「そんなことで死ぬわけじゃないか」

吉岡「そりゃあそうだ。そんな事を気に病んじやあい
かん」

悦子「そのことはさあ、そんなにも気に病まないんだけど
さあ」

陽平「その前に、ちょっとつめたくなからね。俺も、な
んか、ひつかかるんですよ」

悦子「（声もちょっと震えて）そうなのよねえ」

吉岡「まあ。のめ（と二人の前にお茶を出す）」

悦子「――」

陽平「――」

吉岡「若いうちは、思わぬ残酷なことをしてしまふものだ。

私も、あとで考えれば、何故あんなことが言えたのだろ
う、と思うようなことを、人に言ってしまったことがあ
る。傷つけたことがある」

悦子「――」

吉岡「いいじやないか。おまいりに行ってくればいい。誰
も変だと思いやしないさ」

陽平「（うなずく）」

吉岡「いいことだ。陽平がそんな気になるとは、見直した
よ」

陽平「いえ、俺は、そのそんな気にはあんまりならなかつ
ただけど、悦ちゃんが」

吉岡「そんなことだろうと思った（と苦笑する）」

悦子「私だって柄じやないんだけど」

吉岡「照れることはない。何処だ？ その人の家は」